

ちっぽいメ
村



powered by

村長

「ムクリよ。そろそろ、お前も村民集めをしろよ。なあ、ムクリよ」

晴れ。いつもの、山奥。いつもの、切り株である。

「村長はなあ。品川でビラ配りや、声掛けを頑張ったんだぞ。その間、お前は何をしていた？」

あつい。もう、夏だ。

村長は、うつぶせになって、つぶれている。

返事がない。

「きいているのか、ムクリ」

首を持ち上げた。

ムクリが、ムクリ。いや、二人。左が、ムクリ。右のは、なんだろう。

「ええと、左が、ムクリ。右のは」

右のが、軽く頭を下げた。

ムクリを見る。うなずいた。

村長は、目をこすった。右のは、かなり小さい。

とんだ。羽がある。木にとまった。

「あれだ。あれ。あの、知ってるぞ。村長は、何でも知っているからな。も、モンササだろ。モンササ」

モンササは、ムクリの方を見た。うなずく。

「やはりな。やはりな。村長の目に、狂いはない。全く、狂いはないな。やるな、ムクリ。村民が増えたな」

モンササは、ムクリの頭にとまった。公園にいる鳥を、適当に大きくしたようなものだ、と村長は思った。

モンササの背に、のった。村長は、かねてからの夢だった、空の旅を小一時間ほど楽しんだ。

街の方まで、やってきた。もう、日は暮れている。何やら、音楽が聞こえる。笛や、太鼓。祭りである。

モンササは、背の高い建物にとまった。村長は頭の上にいる。下をみると、華やかな光があちこちに灯っていた。

香ばしい、香りだ。

「どこかで嗅いだような」

村長は辺りを見回した。

「あそこだ」

屋台。鉄板で、何か焼かれている。やきそばである。

「なあ、モンササよ。あれを取ってきてくれないか。村長は、ここで見ているから」

改まって、言った。モンササは、毛に覆われた顔を横に振った。

「うまいんだぞ。あれは。ムクリには内緒だ」

モンササは、立ち上る煙を嗅いだ。

「わかった。すこししか入っていない豚肉は、全部お前にやろう」

モンササは、一点を見つめていた。表情を変えず、うなずいた。

「ゆけ、モンササ」

村長は、言いながらモンササから降りた。

滑空。

「あ、フクロウだ」

こどもが、見上げて言った。かまわず、モンササはおりていく。

屋台のおやじが、こちらに気が付いた。目が合う。

おやじの目に、何かが灯った。

透明な入れ物。モンササは、それだけを見ている。

おやじが身をのり出してきた。

もう少し。

モンササは、螺旋を描く。おやじの手が伸びてきた。瞬時に羽を広げ、急停止した。おやじの手は、くうを切った。輪ゴムに、爪を引っ搔ける。

獲った。

「あめえよ。鳥が」

おやじが、もう一人。双子。

モンササは体を回転させ、おやじの手を避けた。ふたが、あいた。焼きそばはおやじの頭にかかった。

止まらない。正面。わたあめ屋だ。頭から、突っ込む。ビニールの袋を突き破った。

モンササは、慌てて羽をばたつかせた。

おやじたちの怒鳴り声の下から聞こえてきた。

仕方なく、村長のもとへ戻った。

村長は、怒らなかつた。モンササの体についていたわたあめに夢中なのだ。

次は、獲る。

一度、モンササは、振り返った。もう、光は淡くなっている。

空に吸い込まれるように、モンササは見えなくなった。